



## ソーシャルイノベーション賞

# 『原料栽培からの薬づくり&みんなでつくる芍薬ファーム構想 ～昔からの知恵を活かした持続可能な地域を～』

伊勢くすり本舗株式会社 代表取締役 加藤 宏明

1570年創業の加藤延寿軒を祖として、古くから薬づくりを生業としてきた伊勢くすり本舗株式会社では、伊勢参りのお土産として600年の歴史をもつ伝統薬「萬金丹」などの販売だけにとどまらず、漢方の原料である芍薬で地域を活性化させようと栽培農家とともに取り組んでいます。

### 日本の薬文化を見直すということ

日本では江戸時代に平穏な時期が250年続き、日本独自の文化が花開いた。医療や薬についても変化が生まれ、医者にかかれない庶民は、病気に対する危機感から自身の健康を重んじるようになったといわれています。軽微な身体の不調は自分で手当てするセルフメディケーションの原型ともいえる『薬を飲む習慣』はこのころから始まりました。「自分で道中用の薬を買って伊勢まで来て、また薬を買ってお土産にして皆に配っていたという文化があるんです。」と加藤さん。当時は薬草だけで薬が作られ、様々な伝統薬・民間

薬が一般庶民の手に届く金額で売られ、自ら薬を求め、自ら薬を服用するという、江戸時代の日本は、世界に先駆けたセルフメディケーション先進国であったといっても過言ではありません。

現代では科学技術が発展し、医師や専門家の言うことに従順になる傾向があります。特に国民皆保険の日本では、医師の処方通り患者は薬を飲み、薬に疑問を持つことは少ないと、加藤さんは感じています。実際には、患者自身が病気や健康について深く学ぶ機会が少なく、健康やいのちに対する責任の所在も曖昧になりがちです。『食育』では、何を



食べるだけでなく、野菜の成り立ちや調理の仕方で変わる栄養成分や、それを自然からいただく、自身の健康に役立てることを学びます。特に子どもたちに教えることで野菜嫌い

が減り、体験から学ぶことで『食の見方』そのものが変わってくる。同様に口に入れる薬についても同じであるべきと加藤さんは考えています。

加藤さんが目指しているのは、この「薬育」です。薬の作り方を学べるファームをつくり、薬草の栽培から薬になる過程を体験し、薬をより身近に感じて学べる機会を増やすことです。畑で育てた薬草を四日市の萬古焼で薬罐（やかん）をつくり、薬草を煎じて飲む。子どもの頃から、苦い薬でもそれで治ったという経験が「薬育」になる。そういった体験の積み重ねが、長い人生での『よくある病気』の対処法や予防につながります。薬草だけでなく、お医者さんからの薬についても、効き目のある、安心できる、自分のカラダにあったものを、自身の知識と経験と感性を活かして選べるようになります。

新型コロナウイルスによって世の中の考え方が変わりました。ウイルスに効果のある薬がないことを知り、ワクチン摂取が進んでもワクチン耐性ウイルス、また別の新型ウイルスの脅威は今後も避けられません。科学万能主義のもろさが露呈し、科学の可能性と限界をきちんと認識する必要にせまられています。医療費も高額医療が主流になり、日本の国民皆保険も自己負担が増えることは避けられなくなります。

「感染症と生活習慣病は分けて考える必要がある。」そう話す加藤さんは薬剤師であり、現代の生活習慣病に対する医療費の高騰にともない、生活習慣病は自己責任・自己負担が増えることになり、より自身が病気や健康に対する知識をつける必要に迫られると話します。

### 栽培から商品化までの薬づくりの在り方

「これからは薬づくりに対しても姿勢を正す必要がある。人を治す薬をつくるのにカラダに良くない農薬を使った漢方薬は作りたくない。

そのためにはコストはかかっても除草剤はつかわず、収量が下がっても駆虫剤・抗菌剤は使わない。病気で悩む人に届ける薬を提供する以上、患者により添った薬づくりが必要です」と加藤さんはいます。現在全ての商品が無農薬というわけではありませんが、生産地の確認や検査、自ら作る薬草を使いできる限り無農薬で作っています。

今後、三重県鈴鹿市で10年かけて畑を10ヘクタールに増やし、芍薬の他、甘草や当帰など多種多様な栽培をおこなっていく計画を立てています。いつか国民皆保険が改正され、患者や消費者の負担が増えれば、不必要な薬を拒否・少量処方、別の療法など、薬についても選ぶようになると加藤さんは考えています。消費者も薬育などにより、正しい薬の知識を持つことで、薬の使われ方も変わる。「中小製薬企業であっても、小規模だからこそできる製薬の在り方・考え方を具体的な取り組みとして示していく必要があります。」と話してくれました。

### 薬草の栽培を通じて農業を考える

農業技術は発展し、特に近代になり機械化・農薬を使うようになったことで生産性が増し、海外では大規模農業が主流になってきています。日本では、世界に比べ小規模農家が多い中、農協を主体とする体制で生産性を上げてきました。もともと薬は薬草を山や野から採取してきて、乾燥させたもの。江戸時代からは、日本でも畑で薬草栽培が盛んになり、国産生薬での薬が作られてきましたが、近年では、薬草栽培にも農薬が使われます。鈴鹿での薬草栽培事業では、毎年2トンの芍薬を無農薬で栽培・収穫に成功しており、今後様々な薬草を無農薬栽培しようとチャレンジしています。加藤さんは世界に誇れる日本の薬の歴史・文化を活かした和薬草ブランド・和漢方ブランドを目指しています。

### 芍薬ファームから広がる可能性

椿大神社という猿田彦大神を主神とする伊勢神宮につぐ由緒正しい神社に近い場所に薬草栽培のファームがあります。神話の時代からこの地は倭姫命・日本武尊の伝説が残っている旧跡があり、古くから奈良や京都の文化の影響を受けています。鈴鹿山麓には、もともと多様な薬用植物が自生しており、民間薬の伝承などの薬の文化が育ってきた土地。「近代の薬を文明としてとらえるならば、伝統薬・漢方薬は文化として、再度価値を評価すべきである。」と加藤さんはいます。

人類は、長い歴史の人間の営みの中で、病と死は繰り返され、できる限りの方法で病気を治し健康を維持する方法を試してきました。その健康の維持も、その長い歴史での食生活を含めた文化・人間の営みを土台に成り立っています。「コロナ禍でワクチンの供給は急がれ、コロナの問題に多く目がいっているが、全て一時的な対処療法だけでなく、現代を生きるための生活習慣・ライフスタイルも含め、長い目で人間に何ができるのかを考えていきたい」と環境も含めて理想的な未来像を加藤さんは考えています。



### 新たな時代を切り開く農林水産ビジネスプランプレゼンテーション大会 2021年2月19日開催

昨年度の新型コロナウイルス感染症の拡大は、消費者の行動や価値観の基準、そしてビジネスを取り巻く環境を大きく変え、わたしたちに大きな衝撃を与えました。この時代を乗り切るための知識やスキルを専門家から学ぶ「新たな時代を切り拓く農林水産人材育成セミナー」修了者が、セミナー後のフォローアップを受け、今後のビジネスプランを発表する場として、令和3年2月19日三重県総合文化センター小ホールにて「新たな時代を切り拓く農林水産ビジネスプラン」プレゼンテーション大会(オンライン)が開催されました。出場者により、商品がもつ魅力や、今後の事業の可能性などが続々とプレゼンテーションされました。

